

V まとめと問題点

1 登山者利用動態

白山の登山者は地元の石川県・福井県からが4割を占めているが、地元は減少の傾向にある一方で、関西、関東を中心に県外からの割合（約6割）が高くなっている。地元以外の登山者の7割以上が初めてであった。登山道は砂防新道（上りの9割と下りの6割）と観光新道（下りの3割）に、宿泊施設は室堂（8割）に集中していた。

<問題点>

初めて白山に登る登山者が多く、登山装備も含めマナーを知らない登山者も多いと考えられる。登山道、宿泊施設の集中利用が顕著である。

2 動物

(1) キツネ・テン・オコジョ調査

3種の糞の各登山道別の数や内容物が明らかとなり、利用の多い登山道（砂防新道、観光新道、エコーライン等）では、少ない登山道（楽々新道、中宮道等）に比べて糞の数が少なかった。昭和50年・51年の調査に比べて、キツネの糞の数は減少していた。キツネの糞11個に輪ゴム、ビニール等人為的なものが入っていた。

(2) カラス調査

ハシブトガラスの高山帯での生息が確認され、よく見られた場所は利用者の多い登山道周辺であった。

<問題点>

キツネやカラスの高山帯での出現は、食物やゴミを食べるために登っていくなど、人為的影響が考えられる。

3 植物

白山高山帯に分布する低地性植物オオバコ、フキ、シロツメクサ、スズメノカタビラなどの分布状況が明らかになった。

(1) オオバコ

南竜道の展望台（標高約2,110m）が最高地点。避難小屋周辺などでよく見られ、特に登山者が多い砂防新道では、登山口の別当出合から甚之助避難小屋付近まで高頻度で連続して見られた。

(2) フキ

砂防新道の標高約2,130mが最高地点。特に登山者が多い砂防新道では、登山口の別当出合から甚之助避難小屋の上まで高頻度で、連続して見られた。

(3) シロツメクサ

南竜ヶ馬場ビジターセンター周辺（標高約2,080m）が最高地点。各登山道の登山口のほか、南竜ヶ馬場や中宮道のゴマ平避難小屋などで確認されたが、分布は限定的であった。

(4) スズメノカタビラ

室堂（標高約2,450m）まで分布が確認され、登山者が多い砂防新道では登山口の別当出合から南竜道分岐付近まで、ほぼ連続して見られた。

(5) セイヨウタンポポ

砂防新道の別当出合のつり橋付近（標高1,260m）のほか三方岩駐車場（標高1,450m）で確認された。

<問題点>

分布拡大に伴う自然植生への影響や近縁種との交雑など高山生態系への影響が考えられる。

(1) オオバコ・フキ・シロツメクサ

交雑による影響は少ないと考えられるが、分布拡大に伴う自然植生への影響及び景観上の問題がある。

(2) スズメノカタビラ

高山帯の近縁種であるハクサンイチゴツナギ、アイヌソモソモ（石川県レッドデータブック掲載種の絶滅危惧Ⅱ類）などとの交雑の可能性が考えられ、交雑するならば、大きな影響がある。

(3) セイヨウタンポポ

交雑の頻度は不明だが、近縁種であるミヤマタンポポとの交雑の可能性があり、大きな影響を与える可能性がある。

4 登山道侵食

(1) 登山道沿いに見られる侵食形態

砂防新道、観光新道、エコーライン、お池めぐりコース、南竜道上に見られる侵食形態の分布地を調べた。その結果、120か所の分布地を把握し、主として人為的要因により形成された「踏み分け道」、「拡大」、「踏み跡」が81か所で67.5%を占めた。

(2) 定点観測地での横断面の計測

融雪期の流水により侵食が進むこと、また登山者の多い夏山シーズン中にも人為的要因による侵食が進むことが示唆された。

(3) デジタルビデオカメラによる撮影とその時の侵食状況

「踏み分け道」を歩行する登山者の割合は上り15.0%、下りが38.2%で、下りの登山者が「踏み分け道」形成に大きな役割を果たしていることが示された。また、けとばしや踏みつけなど人為的要因による侵食の実態を把握した。

<問題点>

人の踏み出しなど人為的要因による侵食が顕著であり、今後も侵食が拡大すると考えられる。

各調査及び執筆者は石川県白山自然保護センターの以下の者が担当した。

登山者利用動態	四手井 英一・野崎 英吉
動物	上馬 康生
植物	野上 達也
登山道侵食	小川 弘司

なお、資料収集等については環境省白峰自然保護官事務所 二神 紀彦氏に、調査及び取りまとめに際しては、白山自然保護センター前所長の堀 日出夫氏をはじめ、職員の館 清氏、徳野 力氏、佐川 貴久氏、三原 ゆかり氏、畔柳 有希子氏、清水 千帆氏にお世話になりました。